
TBSテレビ 『白熱ライブ ビビット』
「多摩川リバーサイドヒルズ族 エピソード7」
に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	川端 和治
委員長代行	是枝 裕和
委員長代行	升味佐江子
委員	神田 安積
委員	岸本 葉子
委員	斎藤 貴男
委員	渋谷 秀樹
委員	鈴木 嘉一
委員	中野 剛
委員	藤田 真文

目次

I	はじめに	1
II	審議の対象とした番組	2
III	委員会の調査と検証	3
1	『ビビット』の制作体制	3
2	本件放送の企画	4
3	多摩川河川敷での取材	4
4	編集と問題のイラスト作成	5
5	本件放送への批判と謝罪	7
(1)	インターネット上の批判	7
(2)	新たな問題が発覚	8
(3)	番組とホームページで謝罪	8
IV	委員会の判断	9
V	「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズの検討	10
1	「迷惑モノ」としてスタート	10
2	シリーズ化した経緯	11
3	ホームレスの描き方の変化	12
VI	本件放送の要因と背景	12
1	制作チームが抱えていた問題点	12
2	制作体制の変化で生じた「すき間」	13
3	バラエティ的な表現の危うさ	13
VII	おわりに——問われた「集団的無意識」	14

I はじめに

平日の午前中は、各局が生放送の情報番組でしのぎを削る時間帯である。かつて「ワイドショー」とも呼ばれた生ワイド番組の流れを受け継ぐこれらの番組は、政治、経済、社会、事件・事故のニュースから、流行や芸能、生活情報まで硬軟取り混ぜた話題を、報道番組とは違う切り口で伝えている。スタジオでは、司会者と各分野の専門家、視聴者の目線に立ったコメンテーターたちが親しみやすく、肩の凝らないトークを繰り広げている。

TBSテレビ（以下「TBS」という）の全国ネット番組『白熱ライブ ビビット』（2017年4月に『ビビット』と改称、以下『ビビット』という）も、こうした情報番組のひとつである。

『ビビット』は2015年9月、東京都と神奈川県の間を流れる多摩川の河川敷で暮らしているホームレスの人たちを題材にした企画を放送して以来、「多摩川リバーサイドヒルズ族」と題してシリーズ化した。2017年1月31日に放送されたその「エピソード7」（以下「本件放送」という）は、法定の狂犬病予防接種を受けさせずに多くの犬を飼っているホームレスの男性を「周辺の住民に迷惑をかけている人物」として取り上げた。その際、この男性を「犬男爵」と呼んだうえ、別のホームレス男性の発言を引用して、「人間の皮を被った化け物」とカラーのイラスト付きで表現した。

こうした放送内容に対し、貧困問題に詳しい大学教授やホームレス自立支援団体の理事長がインターネット上で、「ホームレスの人たちへの差別や偏見を助長する」などと厳しく批判した。その後、取材時の新たな問題も発覚したことを受けて、TBSは3月3日、番組とそのホームページで「取材した男性を傷つける不適切な表現や取材手法があった」と認め、謝罪した。

BPO放送倫理検証委員会（以下「委員会」という）はTBSから提出された報告書などを基にして、3月と4月の委員会で討議した。その結果、「問題が表面化した後、関係者への謝罪や謝罪放送などの対応とともに、二度にわたる詳細な報告書の内容は適切だった。しかし、犬の多頭飼育をしている男性について『人間の皮を被った化け物』と決めつけたのをはじめ、『社会的弱者』とされるホームレスの人を傷つけるような表現方法などは見過ごすわけにはいかない」と判断し、審議入りを決めた。

情報番組などのスタッフの間で、近隣住民とのトラブルや周囲に迷惑をかけている人を取り上げる企画は「迷惑モノ」と呼ばれている。委員会は「本件放送だけではなく、『迷惑モノ』のひとつとしてホームレスの人たち取材してきた『多摩川リバーサイドヒルズ族』シリーズ自体が、ホームレスの人たちへの無理解や先入観、偏見といった問題点をはらんでいたのではないかと推察し、本件放送以前の6回分の内容も

視聴した。

こうした作業や番組関係者への聴き取りを通して、報道・情報系番組の出身者とバラエティー系番組の出身者から成る制作チームが抱えていた問題点や、バラエティー的な表現の危うさなどとともに、ホームレスの人に対する番組スタッフの認識の希薄さも浮かび上がってきた。

II 審議の対象とした番組

『ビビット』は2015年3月末、情報番組『いっぷく!』の後番組として始まり、平日の午前8時から9時54分まで生放送されている。

本件放送は2017年1月31日(火)の午前9時2分から約14分間、「ビビットフォーカス」(以下「フォーカス」という)と題した企画コーナーでオンエアされた。このコーナーは当時、「気になる話題や現象をビビッと深掘りして伝えます」というのをコンセプトにしていた。「フォーカス」で「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズが放送されるのは、これが初めてだった。

VTRの概要を説明するオープニングでは、「激撮!多摩川の不法占拠地帯にビビットディレクターが潜入」といったタイトルが表示され、これまでのシリーズの内容が短く紹介される。「犬の予防接種の義務を放棄し、多頭飼育をするという新たな問題が発生していた」というナレーションの後、河川敷で多くの犬を飼っているホームレス男性Aさんがスタッフに向かって、「何やってんだ、コノヤロー。おい、何やってんだ、勝手に入りやがって、コノー」と怒鳴りながら歩いてくる。ナレーションは「そこに現れたのは犬たちを束ねる長(おさ)、その名も『犬男爵』と呼び、「悪質な犬の飼い主」というスーパーが表示される。

本編ではまず、Xディレクターが周辺の住民たちにマイクを向け、「3匹4匹、まわりつくと怖い」「かまれた人がある」という話を聞き込む。続いて、Aさんの近隣に住んでいるホームレス男性のBさんが登場し、Aさんについて「人間じゃないんだ、あいつは。人間の皮を被った化け物っていうのは、ああいうやつのことを言うんだ」と発言した。Bさんは首から下を映され、音声を変えられている。「“人間の皮を被った化け物”ホームレス 犬男爵とは!?!」というスーパーとともに、目を光らせた犬たちの前で、人間の皮を被った化け物が長い舌を出し、自分の皮をはがす姿を描いたイラストが示された。

Xディレクターたちが犬の鳴き声に導かれるようにして、雑木林に囲まれた空き地にある大小の犬小屋にたどり着くと、いきなり怒鳴りながら近づいてくるAさんとの「出会いのシーン」が再び流される。ここからAさんの身の上話が始まり、河川敷で暮らしている理由や犬を飼うようになったいきさつが紹介される。「犬にほえられる人

は心が曲がってるよ」というAさんの言葉に対し、ナレーションは「あまりにも身勝手な持論を振りかざす犬男爵」と受け、河川法の条文を引用して「どんな事情があろうと、勝手に住みつくことは許されない」と付け加えた。

動物保護団体関係者へのインタビューも交えながら、AさんがXディレクターに「4月に年金が入ったら、犬たちに予防接種をするよ」と約束する場面がオチとなる。ただし、最後にAさんの怒鳴るシーンが三たび使われ、「身近な迷惑行為を教えてください！ 迷惑スポット潜入！係まで」と、視聴者に呼びかけるスーパーが表示された。

Ⅲ 委員会の調査と検証

委員会は、本件放送を含めた「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズを担当してきたXディレクターをはじめ、チーフプロデューサー、新旧の火曜担当プロデューサー、カメラマンら13人のスタッフに対し、合計で約18時間にわたり聞き取りをした。このうち、TBSの局員は8人を数える。並行して、計7回のシリーズと謝罪放送を録画したDVD、TBSから提出された二つの報告書、大学教授らによるネット上の批判や指摘なども検討し、本件放送に至る経緯と「不適切な表現や取材手法」の直接的な原因について検証した。

1 『ビビット』の制作体制

『ビビット』は、TBS情報制作局の情報二部が担当している局制作番組である。情報二部は『王様のブランチ』や『アッコにおまかせ！』も制作している。

番組全体を統括するチーフプロデューサーの下に、総合プロデューサーや企画全般に目を配る企画プロデューサー、2人の総合演出が配され、月曜から金曜までの内容にかかわっている。曜日ごとに制作チームが編成されており、各曜日の担当プロデューサー（以下「曜日プロデューサー」という）がその日の放送や企画の内容を把握する。各曜日プロデューサーの下で、十数人のディレクターが取材・編集をするシステムになっている。

プロデューサーと総合演出はTBSの局員で占められ、ディレクターの多くは外部の制作会社に属している。アシスタントディレクター（以下「AD」という）も含めたスタッフは、合計で約150人に上る。

午前8時台では主としてニュースなどの「発生もの」に対応し、9時台では話題などを掘り下げる「企画もの」が中心になる。「フォーカス」コーナーの題材については、ディレクターが提案する場合とプロデューサーがディレクターに取材を指示する場合があり、曜日ごとの企画会議などを経て決定に至る。企画プロデューサーと曜日プロデューサー、「フォーカス」担当のチーフディレクターらがVTRをチェックする役割

を担っていた。

2016年10月、チーフプロデューサーをはじめプロデューサー数人が入れ替わり、『ビビット』の制作体制とチェック体制に変化が生じた。今回の問題では、これが遠因のひとつになった。

2 本件放送の企画

「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズは2015年9月、火曜班のXディレクターの提案で始まった。一貫して取材と編集を担当し、「潜入ディレクター」として自らVTRに登場していた。6回目が放送されたのは2016年5月で、7回目の本件放送まで半年以上も空白があった。

Aさんについては2016年11月、ある民放の情報番組が「河川敷で思わぬ犬トラブル」と題して取り上げたのに続いて、別の民放でも夕方のニュース番組が「多摩川河川敷に犬20匹!」というタイトルで放送した。12月に入ってから、TBSの夕方のニュース番組と早朝の情報番組も「多摩川で犬を多頭飼育 河川敷を占拠 飼い主直撃!」「住民困惑 多摩川に犬20匹 “無法飼い主”直撃! 言い分は…」と追随した。

こうした放送でAさんの存在を知ったY企画プロデューサー（以下「Yプロデューサー」という）らは、Xディレクターに取材するよう促した。Xディレクターにしてみれば「後追い取材」になるし、「不法占拠と多頭飼育」という二重の問題を抱えているやっかいな人物と感じ、あまり気乗りがしなかった。しかし、上司の意向とあって断るわけにもいかず、ほかの番組とは違う着地点を見つけようという気で了承した。これは、Aさんが年金と廃品回収による乏しい収入源の中から犬たちの餌代を工面している事情や、VTRの最後でAさんが予防接種の約束をする場面などに生かされた。

「犬男爵」という呼び方は、Xディレクターが企画の段階から使い始めたという。このシリーズではホームレスの人たちの実名を一切出さず、いつも顔にボカシをかけてきた。Xディレクターが親しみの意味を込めてか、「キタロウさん」「五右衛門さん」といったニックネームをつけてきたので、「犬男爵」についてもスタッフの間でことさら議論にはならなかった。

3 多摩川河川敷での取材

本件放送のため、Xディレクターは取材交渉も含めて2017年1月11日から計5回、多摩川河川敷に足を運んだ。カメラマンとADを伴うロケ撮影の前日、Aさんに会って犬たちへの思いなどを聞き、取材許可を取り付けた。Xディレクターはホームレスの人に限らず、どんな相手でもその懐に飛び込む取材を得意とし、人懐っこいキャラクターは多くの番組スタッフに認められていた。当初は取材を渋っていたAさ

んも、そんなXディレクターの人となりに接し、好意を持ったようである。

ロケの当日、Xディレクターは現地でカメラマン、ADの2人と落ち合った。カメラマンは、XディレクターがAさんの犬小屋をレポートする場面や犬たちの様子、Aさんへのインタビューなどを撮った。Xディレクターは撮影を続けるうち、「Aさんとの出会いのシーンが必要」と思いついた。

テレビのスタッフが個人の職場や自宅などで取材をする際、事前のあいさつや打ち合わせを経て、初めて訪問するかのように撮影することは、ドキュメンタリーなどでも行われている。XディレクターとAさんが歩きながら段取りの打ち合わせをしていた時、カメラマンとADは少し離れた場所にいたため、会話の内容までは聞き取れなかったが、Xディレクターのハンドマイクがこのやり取りを拾っていた。

TBSの報告書によると、素材テープには「僕たち先に中（に）行っておくんで、普通だったらおかしいじゃないですか。だから『お前ら、ここで何してるんだ』と中（に）行ったら言ってもらって…」というXディレクターの音声記録されていた。

この後、Aさんはカメラマンら3人に向かって「何やってんだ、コノヤロー」などと、ものすごい剣幕で近寄ってきた。激高した様子に驚いて、たじろぐXディレクターの表情は本件放送に映し出されている。カメラマンもADも、それまで取材に協力的だったAさんが突然怒り始めたため、意外な感じを受けた。まもなく、Aさんは平静さを取り戻したそうである。

XディレクターはAさんの近隣に住むBさんにも気に入られ、3人のスタッフのうちで唯一、Bさんの小屋に招かれた。そこで、Aさんについて話すBさんを、何の断りもなく小型カメラで撮り続けた。カメラはBさんからも見える位置に置かれたが、Bさんは「オン」の状態になっていることに気づかなかったようである。

「人間の皮を被った化け物」というBさんの強烈な言葉は、「犬の鳴き声がうるさくて、小競り合いもあった」などという話の最後に、それらしい根拠も示されず唐突に飛び出した。その一方、話の途中ではAさんとの不仲を打ち消す発言もしたという。

Xディレクターはこのシリーズの当初から、報道局出身のZ火曜担当プロデューサー（2016年10月から別の曜日担当、以下「Zプロデューサー」という）に「ホームレスの人を取材する場合でも、必ず取材許可を取るように」と念を押されていた。しかし、別の「迷惑モノ」を取材していた他の曜日のスタッフから、「近所に迷惑をかけている人物だから、許可を取らずに撮影している」という話を聞かされた。XディレクターがBさんを無断で撮影したのは、「河川敷を不法占拠している1人なので、取材許可を得なくても構わないのではないかと、自分で勝手に解釈したからである。

4 編集と問題のイラスト作成

Xディレクターは編集をする際、ナレーション原稿からスーパー、音楽までほとん

ど1人で担当してきた。本件放送の冒頭で「人間の皮を被った化け物」と強調したのは、「河川敷を不法占拠しているうえ、犬の多頭飼育で近所に迷惑をかけている人」という先入観や、『『迷惑モノ』として取り上げる』という上司の意向に引きずられたようである。

当初は1月24日に放送される予定だったため、Xディレクターはその前日、パソコンでVTRをいったん仕上げた。Aさんとの「出会いのシーン」については時系列、つまり取材の順序を入れ替えて編集した。

企画担当のYプロデューサーと火曜の「フォーカス」担当チーフディレクター、放送作家の3人が1回目のVTRチェックをした。Yプロデューサーは「Aさんは思っていたほどひどい人には見えないから、無理にひどい人に描くことはないのでは」と思った。ただ、「Aさんに寄りすぎると、河川敷を不法に占拠しているホームレスの味方のように見られてしまう。それに、あの飼育環境や予防接種もしていないことに対して、動物保護団体からクレームが来るかもしれない」と懸念した。そこで、前半でひどい面を強調し、後半でいい面も描くことにして、Aさんが怒鳴っている映像をVTRの冒頭にも使うよう、Xディレクターに指示した。

「人間の皮を被った化け物」というナレーションについては、「Bさんがそう言っているのだから」と、それほど問題にはならなかった。また、「出会いのシーン」以外にはAさんが粗野に振る舞う場面がなかったことから、Xディレクターは「わざと怒らせていないか？」と尋ねられたが、即座に否定したため、そのままにされた。

この最中、有名な俳優の訃報が入り、本件放送は翌週の火曜に延期されることになった。2回目のVTRチェックは、Yプロデューサーと「フォーカス」担当チーフディレクターが放送前日の1月30日夕方に行ったが、当初の指摘が反映されているかどうか確認するだけだった。

日付が変わって1月31日の午前零時すぎ、W火曜担当プロデューサー（以下「Wプロデューサー」という）と火曜担当チーフディレクター、放送作家の3人が3回目のVTRチェックをした。

報道局に在籍したこともあるWプロデューサーは4か月前、情報制作局の別の番組から情報二部の『ビビット』チームに移ったばかりで、「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズのVTRをチェックするのは初めてだった。バラエティー番組を思わせるような構成や表現には多少違和感を覚えたが、「こういう内容のシリーズとして続いてきたんだろう」と受け取り、具体的な指示は出さなかった。「人間の皮を被った化け物」という表現についても、Bさん自身の発言として通してしまった。

問題のイラストはXディレクターがBさんの話に基づき、「半分人間、半分化け物のイメージで」とイラストレーターに発注し、白黒のラフな案が当初の放送予定日の前日に届いた。「アニメのようなかわいい感じ」だったため、Xディレクターは「もっと

劇画調に」と注文した。本件放送がオンエアされるまでの会議やVTRチェックでは、このラフな案が提示された。

最終的な編集作業に追われていたXディレクターとその手助けをしていた「フォーカス」担当チーフディレクターのもとに、完成したカラーのイラストが届けられたのは、1月31日の未明だった。2人ともこのイラストを一目見て、どぎつすぎると思った。しかし、これから修正を求めたら放送には間に合わないと感じ、そのまま編集作業を続けた。

使用の見送りも含めて、2人でイラストの是非を検討したり、上司のプロデューサーらの判断を仰いだりすれば、画面に出るのを食い止められた可能性がなくもない。

5 本件放送への批判と謝罪

(1) インターネット上の批判

今回の問題が表面化したのは、民放テレビ局出身の大学教授が2月2日にインターネット上で本件放送を批判したことがきっかけだった。この教授は、「犬男爵」や「人間の皮を被った化け物」といった表現について「登場する人物をあざ笑うような姿勢がある」と指摘し、「ホームレスの人たちへの差別や偏見を助長する」などと問題視した。

これに続いて2月6日には、ホームレスの自立を支援するNPO法人理事長がネット上に「TBS『ビビット』のみなさまへ 悪意のある放送はホームレスの人を危険にさらすので、やめてください」という文章をアップした。このNPO法人などが都内でホームレス生活をしている人を対象に行った「野宿者への襲撃に関する実態調査」の結果によると、約40%の人が野宿生活中に何らかの暴力を受けたことがあると回答していた。理事長はこれを引用し、「ホームレス生活をするのは、決して安全なことではなく、暴力被害などのさまざまな危険が隣り合わせである、ということを端的にあらわしています」「ホームレスの人を面白おかしく消費するのはやめてください」と訴えた。

実は、TBS局内でも本件放送を疑問視する声が起きていた。スタジオの副調整室でこの放送に立ち会っていた情報二部の幹部は、「人間の皮を被った化け物」のイラストを見て、懸念の声を上げた。情報制作局でコンプライアンスや放送倫理を担当している情報考査部には、他部門の局員たちから批判的な意見が寄せられた。

大学教授の批判を受けて、情報二部の幹部らはすぐに協議した。「単純な訂正やお詫びで済むことではないので、Aさんのその後を追い、4月ごろに『ビビット』で続編を放送しよう」という方針で一致した。上司の指示でXディレクターが2月3日、Aさんに会って放送内容を説明したところ、「犬男爵」という言葉には必ずしも不快感を示さず、続編の取材にも応じる様子だったという。

2月16日には、新旧の火曜担当プロデューサーが前述のNPO法人理事長に面会し、本件放送の問題点を詳しく指摘された。

(2) 新たな問題が発覚

前述の教授は2月27日、本件放送をめぐる問題提起の第2弾として“「TBS『ビビット』にやらせを頼まれた」とホームレス男性が証言”というタイトルの文章をネット上にアップした。多摩川河川敷でAさんに会った教授は、怒鳴りながら歩いてくるシーンについて「この場面はTBSに頼まれた。カメラマンが向こうで待ち構えているところに『怒鳴って来てくれ』と頼まれて、言われた通りに演技した」というAさんの話を紹介し、「やらせ」疑惑を指摘した。

その日のうちに情報二部の幹部らがAさんに会い、取材時の事実関係について尋ねた。Aさんは「頼まれてやった」の一点張りだったが、その一方でXディレクターへの好意的な印象は変えなかったという。しかし、続編の取材については態度を硬化させたため、幹部らは続編の制作をあきらめざるをえなかった。

2月28日、BさんからTBSに電話があり、プロデューサーの1人が対応すると、自分のことは撮らず、放送しない約束だったと抗議された。Bさんは本件放送を見ていなかったが、知り合いから画面に出ているのを知らされたという。Xディレクターも承諾を得ていないことを認めたため、番組責任者らが翌日、Bさんを訪ね、お詫びをした。

(3) 番組とホームページで謝罪

表現方法だけではなく、取材時の問題も指摘されて、危機管理のレベルは上がった。このため、情報制作局とコンプライアンス室、編成局、報道局などの担当者が対応策を協議し、3月3日に番組とそのホームページで「不適切な表現と取材手法」について謝罪した。その前日には、番組担当者らがAさんとBさんに会い、番組などで謝罪することを伝えていた。

番組では約1分間、「放送内容と制作過程を改めて検証し、取材した男性を傷つける表現や取材手法に、不適切な点があったと考えます」などとコメントした。ホームページには、三つの問題点について記載した。

まず「不適切な表現」として、Aさんを「犬男爵」と呼んだり、Bさんの発言を引用してイラストとともに「人間の皮を被った化け物」と表示したりしたことを挙げた。

次に、Bさんへのインタビューは本人の承諾を得ずに撮影されたもので、「不適切な取材手法」と認めた。

三点目は、Aさんが怒鳴りながら歩いてくるシーンについてである。「この出会いの場面は、A氏を『すぐに怒鳴り散らす粗暴な人物』と印象付ける結果となり、不適切

な手法でした」と述べた。

IV 委員会の判断

「NHK・民放 番組倫理委員会」が1993年にまとめた「放送番組の倫理の向上について」の提言は、「放送人としての心構え」の第3項で「取材対象に対し、謙虚で誠実であること」を挙げ、「時代を超えた不変の原則——社会人としてのマナーや品位、公平な態度、人権・プライバシーの尊重などの原則を守る」と明記している。

また、日本民間放送連盟編集の「民放連 放送基準解説書2009」は第1章「人権」の第5項「人種・性別・職業・境遇・信条などによって取り扱いを差別しない」について、「人種・性別・職業・境遇・信条・障害や身体的特徴、疾病などを表現する時に、なにげない表現が当事者にとっては重大な侮辱あるいは差別として受け取られることが少なくない。当事者の人権を尊重し、かりにも侮辱あるいは差別されたという念を抱かせることのないようにしなければならない」と書いている。

本件放送は、こうした原則や規定に抵触する。

Aさんについて、揶揄していると受け取られかねない「犬男爵」と呼んだうえ、Bさんの発言を引用して、極端に誇張したイラストとともに「人間の皮を被った化け物」と決めつけた。Bさんの話の脈略にはまったく触れず、Aさんの人間性を否定するような強烈な言葉だけをピックアップした編集や表現方法には弁解の余地がない。

Aさんがカメラマンらに向かって怒鳴る「出会いのシーン」は、Xディレクターが意図したものなのか、それとも想定を超えた成り行きだったのか。事実経過を詳しくたどると、「過剰な演出」とまで言い切れるかどうかは微妙である。しかし、VTRでこのシーンを冒頭から計3回も使い、「すぐに怒鳴り散らす粗暴な人物」という印象を視聴者に与えたことは、表現上の問題として看過できない。

Aさんの人格を傷つけるだけではなく、ホームレスの人々への偏見を助長する恐れもあるこれらの表現は不適切であり、放送倫理違反は明らかである。

そもそも、「人間の皮を被った化け物」などというBさんの話は断りもなく撮影され、放送された。委員会はテーマの重要度や取材目的、公共性・公益性との兼ね合いから、必ずしも「無断撮影」自体を否定するものではない。しかし、この場合は、TBSが報告書で「重大な信義則違反」と認めているように、Bさんとの信頼関係を損ねる行為であり、これも放送倫理違反と判断する。

一方、今回の問題が表面化した後、TBSの一連の対応は迅速で、適切だった。番組とホームページでの謝罪の内容も率直に自らの過ちや問題点を認めており、真摯な自律的姿勢がうかがえた。

再発防止策は3月半ばから実施された。まず、スタッフの人権意識を高めるための

セミナーを継続的に開催している。もうひとつの対応策として、週1回開かれる『ビビット』全体の企画会議に情報考査部長の出席を義務づけた。提案の段階からより厳しい倫理的観点でチェックし、企画自体が見送られるケースも出ていると聞いた。

V 「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズの検討

結論は以上だが、委員会の意見書は放送倫理違反の有無を判断することだけが目的ではない。どうして放送倫理違反を問われるような放送に至ってしまったのか、どこに、どういう問題が潜んでいたのかを明らかにし、当該局はもとより、放送の現場を担っている人たちに自省や自戒を促すことも委員会の重要な役割と考えている。そこで、もう少しこの意見書につき合っていたきたい。

TBSは番組のホームページで、「多摩川リバーサイドヒルズ族」というシリーズのタイトルをめぐっても「不適切だった」と非を認めている。委員会は本件放送につながる問題点を探るため、「迷惑モノ」のひとつとしてシリーズ化された過去6回の放送内容についても検討した。

1 「迷惑モノ」としてスタート

『ビビット』が始まって間もない2015年夏ごろから、「ゴミ屋敷」などのご近所トラブルを取り上げる「迷惑モノ」の企画が視聴率を取るため、他局やTBSの他番組でも競って放送していた。

Xディレクターが最初に手がけた「迷惑モノ」は、2015年8月に放送された「横浜・大黒ふ頭に深夜集結し、公道でドリフト走行を繰り返す迷惑若者たち」だった。危険も予想される取材に際し、自ら「潜入ディレクター」と称するようになった。

TBSの深夜番組などで多摩川河川敷のホームレスの人たちの存在を知ったXディレクターは、次の「迷惑モノ」候補として提案し、現地を下見した。しかし、当時の火曜担当だったZプロデューサーは乗り気ではなかった。ホームレスの人々を扱う場合、人権への配慮などさまざまな観点から慎重にすべきだと考えたからである。同じく報道局出身の情報考査部長とも相談した結果、「ホームレスの人を持ち上げることも、おとしめることもしない。河川敷の不法占拠に対する河川事務所の見解を必ず入れること」という条件で取材を認めた。

2015年9月1日に放送された「多摩川リバーサイドヒルズの実態とは？」と、9月8日放送の「パート2」のVTRには、重複する部分が多かった。1回目では編集作業が放送に間に合わず、途中からスタジオでのトークに切り替わった。このため、2回目は編集済みのVTR全編を改めて放送したからである。

VTRでは、「そこには予想をはるかに超えた驚愕の迷惑ホームレスタウンが広がっ

ていた」というスーパーやナレーションが流れる。発電機を持ち込み、家電製品や水道、ガスコンロも備えている男性らがホームレスになった事情や暮らしぶりを紹介した。この企画は、インパクトがあり、視聴者を引きつけそうな映像を見せる「画（え）モノ」としての要素も帯びていた。音楽については、人気歌手のヒット曲「リバーサイドホテル」が2回目で流されて以来、このシリーズのテーマソングのように使われてきた。

1、2回目とも多摩川を管理する河川事務所の見解を挿入することで、河川敷のホームレスを「河川法に違反して住みつき、周辺住民に迷惑をかけている人たち」と決めつけるようなトーンだった。1回目では、VTRを見たコメンテーターたちがスタジオで「普通の人以上の生活をしている。冗談じゃない。河川敷には怖くて行けない」などと感想を言い合うなか、「勝手なことをやっているように見えるが、彼らは社会的弱者なんです。それを忘れると、問題の解決にはならない」という、ある出演者のコメントは印象に残るものだった。

2 シリーズ化した経緯

同時間帯に並んでいる他局の情報番組に比べ、後発の『ビビット』は視聴率競争で苦戦していた。そんななか、多摩川河川敷で暮らすホームレスを取り上げた1、2回目が好視聴率を挙げたためシリーズ化され、火曜の名物企画として定着するよう期待された。

2回目から1か月後の10月6日に放送された3回目は、中小企業の役員だったという別のホームレス男性にも取材し、テレビや炊飯器などの家電製品に囲まれた暮らしぶりを紹介した。前回登場した男性を再び取材し、その男性がXディレクターに手作りのラーメンを振る舞う場面もあった。

「リバーサイドヒルズ 新たなる住人」と題した4回目は、年の瀬の12月29日に放送された。ホームレスによる文学作品を対象にした「路上文学賞」の第4回受賞者に関する新聞記事に着想を得て、「多摩川河川敷に受賞者の“文豪ホームレス”を探しに行く」という企画になった。Xディレクターは結局、受賞者を見つけられなかったが、木の上にも小屋を作り、ドラム缶の風呂まで持つ別のホームレスたちと知り合った。「多摩川ブルース」という歌を作った男性がギターを弾きながら披露した歌には、ホームレスの孤独感や悲哀が込められていたが、VTRの最後は例によって、「彼らは不法占拠者」という河川事務所の見解で締めくくられた。

Zプロデューサーは前述したように、多摩川河川敷のホームレスを「迷惑モノ」「画モノ」として取り上げる提案に対し慎重論を唱えていた。このシリーズでイラストが初めて使われた4回目では、「文豪ホームレス」のイメージとしてつぎはぎの多い服を描いた当初のイラストを修正させた。いわば「ブレーキ役」として振る舞ってきたも

の、視聴率や面白さを重視するほかのプロデューサーらの意見に押し切られるケースが多かった。

Zプロデューサーが案じていたのは、ホームレスの人たちやその自立支援団体などからの苦情や批判だった。こうした声や意見がスタッフらに届かなかったことも、シリーズを続ける理由のひとつになった。

3 ホームレスの描き方の変化

「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズ7回のうち、2016年1月5日に放送された5回目は異色に映った。

Xディレクターは、前回の取材で知り合ったホームレス男性が大みそかの夜も空き缶を収集し、初日の出を見ながら今の生活と今後の希望を語る姿を密着取材した。この男性は自身を証明する公的書類を失ったため、社会復帰できないと悲観していたが、Xディレクターは地元の市役所に取材して、公的書類の申請方法や生活保護を受けるための手続きなどもVTRで提示した。ミニドキュメンタリーと言ってもいい内容で、委員会ではシリーズのなかでこの回を評価する意見が多かった。

こうした描き方の変化は、Xディレクターが多摩川河川敷に何度も通い、ホームレスの人たちとの人間関係を築くうち、彼らが置かれた立場への理解を深めたからだろう。Zプロデューサーもドキュメンタリー的な手法への転換を思い描き、「奇をてらった演出や自分の感想は要らない。年越しの様子を淡々と撮り、本音を聞き出せばいい」とアドバイスしていた。

2016年5月24日に放送された6回目では、これまで登場したホームレスのその後を追いながら、多摩川河川敷で増えている大量のゴミの不法投棄問題にも目を向けた。ホームレスと関連づける周辺住民の予断や憶測に対して、バーベキューなどを楽しんだ行楽客らの第三者が捨てた可能性を指摘した。

VI 本件放送の要因と背景

「迷惑モノ」としてスタートした「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズは回を重ねるうちに、ホームレスの人々への見方や描き方が変わってきた。それなのになぜ、放送倫理に違反する本件放送に至ったのか、その要因と背景を探りたい。

1 制作チームが抱えていた問題点

『ビビット』の制作チームのうちTBS局員は、報道・情報系番組の出身者と主にバラエティー番組を作ってきた制作局出身者だった。一般論として報道系の記者や制作者には、世の中の動きや出来事に対し敏感に反応するジャーナリスティックな感覚

と、正確な情報を追い求める取材力が必要となる。一方、バラエティー系の制作者はより多くの視聴者の関心を集めようと、見せ方や演出面で工夫を凝らす。料理にたとえれば、どんなにいい素材を仕入れても、おいしくなるかどうかは料理人の腕次第だろう。

報道・情報系とバラエティー系の人間は同じテレビの世界で仕事をしていても、育ち方や発想、スキル、放送倫理のとらえ方などが異なっている。番組を支える「車の両輪」として両者の持ち味が生かされることを期待してのチーム編成だったが、スタッフへの聴き取りからは、必ずしもじっくりしていたとは言いがたい実態が浮かんできた。むしろ、「対立」という言葉すら飛び出した。

もともと『ビビット』は「面白くてエッジの効いた番組」をめざしてスタートしたため、バラエティー系の人間が「面白さ」を追求し、報道系の人間は主として危機管理的な役割を担うという構図だった。このため、バラエティー系の局員が主要なポストに配され、「面白さ」を優先する雰囲気が強かったようである。結果論を承知のうえで言えば、「車の両輪」としてのバランスを欠いた制作体制が、このシリーズの当初からはらんでいた問題点を見過ごすことにつながったと思われる。

2 制作体制の変化で生じた「すき間」

2016年10月、『ビビット』の制作体制に大きな変化があった。報道局から新しいチーフプロデューサーが着任したのをはじめ、プロデューサーの何人かが入れ替わった。ホットな情報をより重視する路線変更をめざしての人事異動と人員配置だった。2017年4月には番組名も『白熱ライブ ビビット』から『ビビット』に変わった。

路線変更のため総合演出が増員されたが、ニュース性の強い情報を扱う午前8時台にかかりきりで、9時台の企画コーナーは企画プロデューサーや各曜日のスタッフに任せる形となった。

制作体制の変化に伴い、火曜担当プロデューサーもZプロデューサーからWプロデューサーに変わった。「フォーカス」コーナー担当のチーフディレクターも、「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズにかかわるのは、本件放送が初めてだった。こうした理由から、二重三重のはずだったVTRのチェック体制に「すき間」が生じ、「人間の皮を被った化け物」などの表現がそのまま放送されてしまう事態を招いたのではないかと。

3 バラエティー的な表現の危うさ

Xディレクターは『ビビット』の制作チームに加わるまで、バラエティー系の番組でディレクターを務めてきた。「多摩川リバーサイドヒルズ族」シリーズでも、取材対象を興味本位に描こうとするバラエティー的な演出と表現方法が随所に見られた。

本件放送で例を挙げてみよう。

Xディレクターらが犬の鳴き声を頼りにAさんの犬小屋にたどり着くと、散乱している大量のゴミのなかにマネキン人形の首もあった。それを見たXディレクターは「おっ」と驚いて、のけぞった。「なんとそこには不気味な生首」というナレーションとともに、「生首」というおどろおどろしい字体のスーパーが表示される。緊張感が高まったところに、Aさんが怒鳴り込んでくるという構成だった。スタッフへの聴き取りの際、この「生首シーン」について「わざとらしい」「不自然」との印象を抱いたという声も聞かれた。

このシリーズではこれまでも、「ホームレス〇〇さんの豪邸 テレビ初公開」といったスーパーがしばしば使われてきた。視聴者の興味を引くための工夫かもしれないが、放送倫理に違反する本件放送の表現は、この延長線上に位置づけられるだろう。こうしたバラエティー的な表現が許容されるのは、題材や取材相手によりけりではないか。

VII おわりに——問われた「集団的無意識」

TBSの報告書は反省点のひとつとして、「ホームレスの人々とホームレス問題に対する私たちの無理解」を挙げている。

「多摩川リバーサイドヒルズ族」というネーミングやテーマソングのように流してきた「リバーサイドホテル」については当初、一部のスタッフから「ホームレスの人たちを茶化しているのではないか」という疑問も出た。しかし、大半のスタッフはそれほど違和感を持たなかったため、そのまま使われ続けた。ホームレス問題を取り上げるというよりは、新たな「迷惑モノ」「画モノ」の取材対象として見ていたのではないか。ホームレスが生まれる背景や社会に対する認識が希薄なスタッフたちは、次のようなナレーションやスーパーの表現も放置してきた。

Xディレクターが出会ったホームレスの1人を「俺たちの楽園に入ってくるな、とばかりにバイクで逃げ去った」とからかう。「不法占拠」を指摘するXディレクターに「基本的人権があるんだから、それを尊重してもらわないと…」と話す別のホームレスについて、「憲法を持ち出し、河川敷に住む権利を主張する」と皮肉る。ホームレスの暮らしぶりを紹介する際には、「インターフォン完備のゴージャスな家」「テレビ付きの巨大御殿」といった大仰な言葉が飛び交った。映された生活実態とかけ離れたナレーションやスーパーなどは、「揶揄したり、面白がったりしている」と批判されても仕方がないだろう。

しかし、こうした表現方法はそれまで「体当たりの取材も含め、いかにもXディレクターらしい」と内輪で受けていたようである。多くのスタッフの間に「多摩川の

ホームレスは違法行為をしているのだから、文句を言ってこないだろう」という先入観はなかっただろうか。

今回の問題は、こうした自覚や思慮を欠いたままシリーズを続けてきたスタッフたちの「集団的無意識」が根本から問われたと言えよう。

なお、Aさんが怒鳴りながら歩いてくる「出会いのシーン」や、「人間の皮を被った化け物」というBさんの発言をめぐって、委員会では取材者と被取材者の関係に踏み込む意見も相次いだ。「テレビ局のスタッフを前にして、取材される側が取材者の“無言の要請”を感じ取り、その期待に応えようとついつい過剰な言動をとってしまう事態も考えられる。これは、相手が社会的弱者の場合に限らないだろう。取材スタッフはこうした関係性にどれだけ注意を払っていたのか」という指摘である。

TBS情報制作局は3月24日、前述したNPO法人理事長を招き、勉強会を開いた。TBSの報告書は、『ビビット』のスタッフの約8割が参加したこの模様にも触れている。

理事長は、ホームレス生活を余儀なくされた人たちの実情から話し始め、「昨今は『貧困』が見えづらくなっている。メディアは『見えづらい貧困』を避けて、『目立つ貧困』を取り上げるため、かえって貧困の現実が伝わりにくくなっている。そうした現状を憂慮しているからこそ、取材には時間をかけてほしい」などと要望したそうである。

報告書には、スタッフの感想も紹介されている。

「話を伺えば伺うほど、過去6回も含め、いかに浅い取材で放送を出していたかを再認識した」

「今回の取材も、支援する側の人の声や、行政側の声などを多角的に入れるべきだったのに、それができてないことは、改めて反省すべきと思った」

「自分は『貧困』に興味があり、テレビの欲しい“画”と取材される側の思いにずれがあるのは感じていた。(中略)今は『見えない貧困』が大きな問題となっているのは気付いているが、“画的”に地味なこの問題を今後、どう扱っていけばいいのか、答えはわからなかった」

いずれも、今回の問題に対する率直な現場の声である。

委員会はもちろん、問題を起こした番組にかかわったスタッフの意識面の倫理性まで判断する立場にはないが、『ビビット』の制作チームが陥った「集団的無意識」の落とし穴をどう乗り越えていくかも、現場レベルで議論し、一人ひとりが「わが事」として考えてほしい。そして今後は、世間の出来事や関心事を身近な語り口で伝える情報番組ならではの可能性を広げるべく、本件放送の反省と教訓を生かすよう願っている。